

(鹿児島郡十島村諏訪瀬島)

位置と環境

切石遺跡は、鹿児島郡十島村諏訪瀬村切石に所在する。遺跡の立地する諏訪瀬島は、九州本島から西南に204kmの洋上で、トカラ列島のほぼ中央部に位置し、列島第2の火山島である。

切石遺跡は、現在の切石港から西に50mほど内陸に入った地点の台地上に立地している。この台地は火山の降下物によって形成されており、起伏のあるやや複雑な地形をなし、現在ではタケ林となっている。台地の北側には今こそ水は流れていないものの、かつては水量の豊かな川であったと思われる谷が存在する。

調査の経緯

1989年ごろから、切石港西方の漁業倉庫の後ろの崖面が台風の来襲などによって崩壊し、その崩壊土中より、複数の島民によって多量の遺物が採集されていた。その後、十島村教育委員会は、島民の協力を得て、採集された遺物の収集に努めた。そして、採集遺物や遺跡の性格や規模について把握するために、県教育委員会に依頼し、1992年11月8日から11日に現地調査を実施した。採集遺物は、鎌倉時代から江戸時代にわたる時代幅のあるもので、陶磁器類から銅製品、玉類の多種に及ぶものであった。なかでも徳之島の伊仙町に窯跡が所在するカムイヤキと呼ばれる陶質土器の完形品の発見は、この分布圏の北限として注目された。

発掘調査は十島村教育委員会の依頼を受け熊本大学文学部考古学研究室の甲元眞之教授を中心に、1994年4月29日から5月7日までの9日間にわたって行われた。

遺構と遺物

発掘調査において検出された遺構は、祭祀遺構、住居跡、配石遺構各1基であった。

祭祀遺構は、内部に土坑を持つ配石部の北西部を取り囲む積石部からなる。積石部はその位置的な関係から配石部と同時に造られたと考えられるが積石部から出土した陶磁器の年代からみて、磁器の伝世



第1図 切石遺跡の位置

がなければ14世紀後半から15世紀初頭に構築された可能性が高い。そして、土坑から出土した陶磁器の年代幅から祭祀遺構の廃絶時期は18世紀以降と推定できる。

土坑中からは138個体の陶磁器と16個体の灯明皿が出土した。陶磁器は逆さまに重ねられた出土状態で、陶磁器と土坑の間には一定の空間があり、土坑付近から釘が出土していることから、陶磁器は木箱などに入れ土坑内に置かれていたと推測されている。

特徴

祭祀遺構の性格については不明な点が多いが、鏡や銅銭といった青銅製品の出土や多量の碗と皿に限定された陶磁器の埋納は、到底一般的な居住の場とは考えられない。

住居跡は、彫り込まれた層位から、祭祀遺構よりかなり遅れて構築されたものと考えられるが、祭祀遺構とおなじ火山灰層で覆われていたことから廃絶時期はほぼ同時期であったと想定されている。

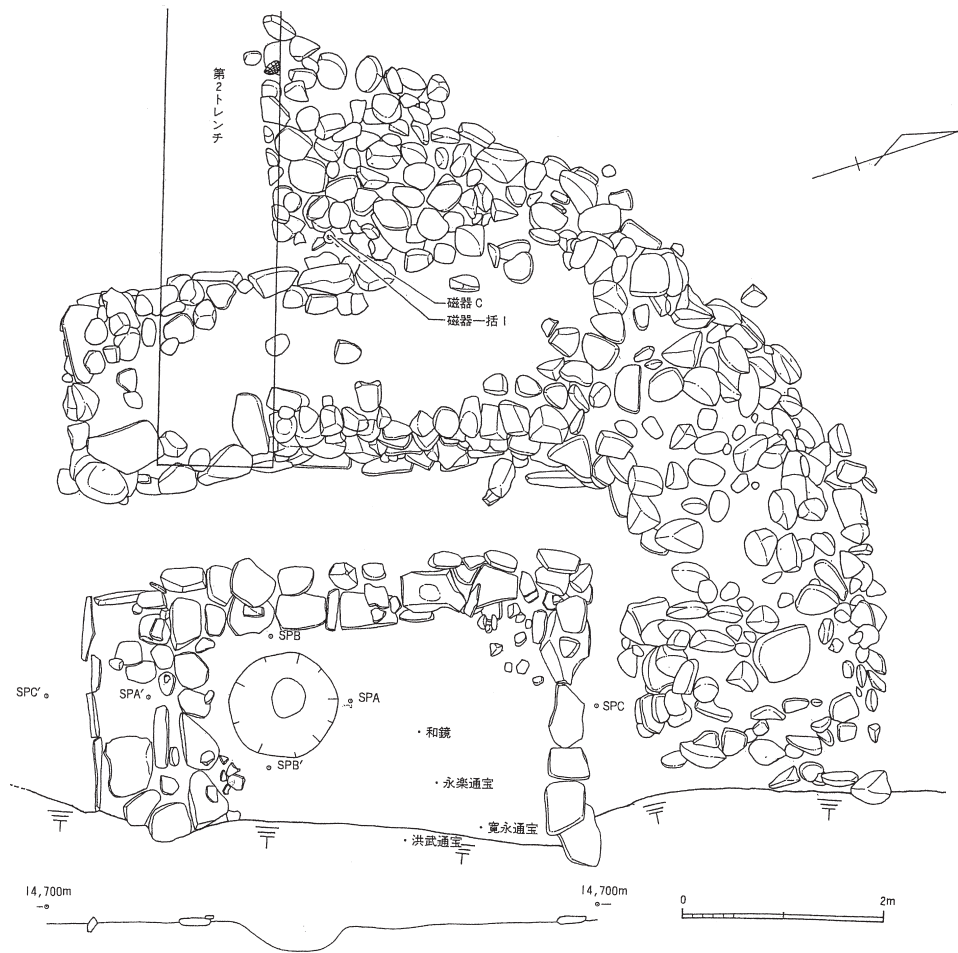
出土した遺構、遺物はともに文献記録のほとんどない概期の南西諸島の様相を把握するための第一級資料である。

資料の所在

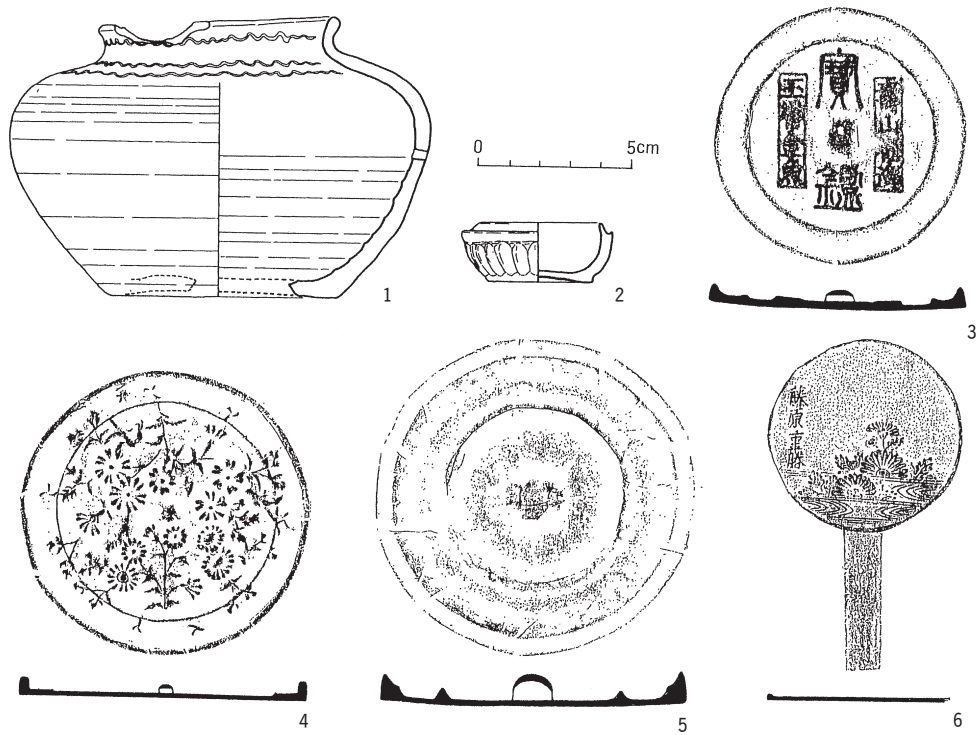
出土遺物は、十島村歴史民俗資料館に展示・保管されている。

参考文献

十島村教育委員会1994「トカラ列島の考古学的調査」『十島村埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集
(新東晃一)



第2図 祭祀遺構実測図



第3図 調査以前の採集遺物